

お茶うけ 第51話

遺愛女学校のハンプトン先生

NHKの衛星放送、遺愛女学校(現遺愛学院)の講堂の壁には、同校の創立に深い関わりのあった人々や、歴代校長の写真が整然と掛かっています。

遺愛女学校は、明治15年(1882年)に北海道の函館に、キリスト教のプロテスタント系のアメリカ・メソジスト教会により創設されました。それより数年前の明治9年に、米国の宣教師で函館領事代理を兼務していたハリス氏の夫人が、日本の女性の社会的地位を高めるには、女子を教育することが望ましいという内容の、「How are we to reach the women?」の文章を米国に送り、函館に女学校が必要であると訴えました。その頃、自分の愛娘を病で亡くして悲しんでいたカロライン・ライト夫人は、その文章を読んで感銘を受け、娘のために蓄えた教育資金を、日本の女子の教育のために神に捧げようと決心し、趣味の手芸品の売上金も加えて、函館の学校の建築資金にと献金しました。これが遺愛女学校の設立基金となりました。したがって、当初の学校名は、「カロライン・ライト・メモリアル・スクール」でしたが、人々が覚えやすい日本名にすることになり、明治18年に「遺愛女学校」(遺愛:Remembrance of Love)と名付けられました。

遺愛女学校は、また優れた指導者に恵まれました。

ミス ハンプトン先生は、遺愛女学校の設立前年の明治14年に函館に来て、学校創立のために働き、初代校長のミス ウッドウォースの後を受けて、第2代校長を勤めました。校長を退いてからも、デカルソン校長の代まで遺愛に留まって、学校運営に大いに貢献しました。教師としての在任期間は、創立時から大正5年(1916年)までで、実に35年に及びます。教育熱心で、しかも怪我をしたり風邪を引いた生徒を親身になって世話をするなど、温かい心で生徒に接しましたので、「遺愛の母」と慕われました。

第4代の校長ミス デカルソンは、明治23年に遺愛女学校に着任し、大正14年(1925年)まで35年以上にわたって校長を勤めました。厳格な教育方針を掲げ、自らも不屈の精神で献身的に学校に奉仕して、同校に「信仰、犠牲、奉仕」の校風を築き、学校を発展させました。

さて、「遺愛の母」であるハンプトン先生は、3つの母の顔を持っていました。

1つは、生徒を慈しみ育てる優しい母の顔です。

2つめは、最良の校舎と環境で生徒たちに勉強をさせたいという、賢い母の顔です。ハンプトン先生は、校舎を建築する時は、他の多くの学校を見学して回り、その良い点を遺愛の校舎に取り入れました。工事に当たっては、材料を吟味し、土台をはじめ床板の張り方に気を配り、廊下の天井や階段の手すりの飾りを丁寧に美しく仕上げよう指導しました。廊下はカンナをかけると木が減るからと、ざらざらの荒板をそのまま張らせて、毛布で光沢がでるまで磨き上げました。磨き込まれた廊下は、90年経った今でも、光沢を帯びていて当時は偲ぶことができます。また、ハンプトン先生が前庭に植えた松や桜が成長して美しい林となっています。

3つめは、家計を預かる用心深い母の顔です。明治40年(1907年)になると、学校は、生徒数が増えて手狭になったので、創立以来の元町から、現在の杉並町に移転することを決めました。新しい土地に大量の木材が運び込まれ、新校舎の建築が始まりました。ところが明治40年は、遺愛女学校と函館市を大変な苦難が襲いました。先ず、5月12日に、建築中の寮から出火して新校舎の全部が焼失してしまいます。9月の新学期の授業のために、急いで元町の旧校舎を再整備して教室の目処を立てホッとした矢先、8月25日の函館の大火(全体の約半数の9000戸弱が焼失)で、その旧校舎が全焼してしまいます。再度、計画を練り直し、杉並町の土地に新しい校舎を建て、翌年の1月からの授業再開にこぎつけました。この思いもかけない事態に対して、ハンプトン先生は沈着・冷静に対処し、事業を進めました。

この2度の火災のために、1年のうちに校舎を2回も建てることになりましたが、その費用を賄ったのは、ハンプトン先生が最初に購入した木材に掛けた保険の保険金でした。私は、資材に保険を掛けるという、ハンプトン先生の用心深く周到な危機管理の手だてに感心しました。これは、ハンプトン先生が、学校の建築資金は神に捧げられた大切なお金であり、それを最大限に生かして使うことが、神の意思と人々の善意に応えることであると信じていたからであると思います。

以上

参考資料:

『遺愛100年史』遺愛学院発行

